http://decfamily.p1.bindsite.jp/2016/

We 13R

No.025　16/05/12

芥川の心意気

『羅生門』はどこまで進んだだろうか？

『羅生門』の第一段落（下人のいる場所で全体を四つの大段落に分けたときの第一段落）を読むと、主人公は子供から大人への「境界」にいる青年（ニキビ）だし、話が展開する場所は洛外と洛中の「境界」だし、時間を考えると、夕方から夜への「境界」の時間帯、秋から冬への「境界」の季節、そして、平安末から鎌倉時代にかけての「境界」の時代がこの物語の背景になっていて、要するに、この小説が「境界」の物語であることが分かるのである。もちろん、生と死の「境界」、飢え死にと盗人の「境界」でもある。

私が担当しているクラスでは、いよいよ老婆の論理（教科書43ページ）を分析するところにかかった。ちなみに、「老婆の答えが存外平凡」とあるが、平凡でない答えって、例えば何？　下人はその平凡さに「失望した」とあるが、なぜ下人は失望したのだろう？　書かれていないそんなことを想像しながら読むのが面白いところである。

＊

ところで、この小説を読んでいると「作者の芥川って、暗い人だったのでは？」といった印象を持つ人がいるかも知れない。しかし、決してそんなことはない。

つい先日も熊本地震があったが、芥川の生きていた時代にも、関東大震災という未曾有の震災があった。その際、芥川は震災に関連した評論やエッセイ、また、震災を反映した小説などを発表している。

東日本大震災の際、当時の東京都知事が

「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を一回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う。」

などと発言して、被災地の方々のみならず、良識ある人々の顰蹙を買って、翌日撤回するといったことがあったが、同じようにこの関東大震災の際には、実業家の渋沢栄一が、

「今回の大震災は到底人為的のものではなく、何か神業のやうにも考へられてならない。即ち天譴（てんけん）といふやうな自責の悔を感じない訳にはいかない。」（『龍門雑誌』1923年２月）

と書いて、天譴（てんけん＝不都合なものに対する天の咎め）論を展開したりした。

それに対して芥川は、

「同胞よ。面皮（めんぴ＝面の皮）を厚くせよ。「カンニング」をみつけられし中学生のごとく、天譴なりなどと信ずること勿れ。僕のこの言を倣す所以は、渋沢子爵の一言より、滔滔と何でもしゃべり得る僕の才力を示さんが為なり。されどかならずしもその為のみにはあらず。同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷になること勿れ。」

（「大正十二年九月一日の大震災に際して」）

と主張した。難しい文だが、簡単にいえば、天譴などといって消極的になるのではなく、我々はもっと希望をもって、前向きに生きなければならないと訴えているのである。建設的で力強い主張である。

『羅生門』を書いた時、芥川は23歳。震災の時は31歳。しかし、４年後の35歳の時、彼は自ら命を絶つのであった。

（「国語教室」102 号掲載の、都留文科大学名誉教授関口安義先生の文章を参照した）